様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４　年４　月　２７　日現在

機関番号：３５３１１
研究種目：基盤研究　（C）
研究期間：2009　～　2011
課題番号：２１５２０１７４
研究課題名（和文）シラク政権下における美術館構想―ケ・ブランリー、ルーヴルを事例に

研究課題名（英文）　A Study of President Jacques Chirac’s Museum Project―the Musée du Quai Branly and the Musée du Louvre

研究代表者　松岡　智子　(Matsuoka Tomoko)
倉敷芸術科学大学・芸術学部・教授
研究者番号：　９０２７９０２６

研究成果の概要（和文）：
博物館学的アプローチによる本研究によって、シラク政権下に設立された、アフリカ、アメリカ、オセアニア、アジアのオブジェを展示するルーヴル美術館の「パヴィヨン・デ・セッション」やケ・ブランリー美術館のみならず、国立移民史博物館もまた、多文化社会を構築するための、シラクの強いイニシアティヴによって作られたものであることが判明した。そして、彼の構想の全体像への解明に向けた今後の継続的調査によって、さらなる展開の可能性のあることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：
This study from museological viewpoints elucidated that not only the Pavillon des Session in the Musée du Louvre,but also the Musée du Quai Branly which houses objects from Africa, the Americas, Oceania, and Asia, and la Cité nationale de l’Histoire de l’Immigration were created from President Chirac’s strong initiatives to construct a multicultural society. The study also demonstrated a good potentiality for further investigation for the purpose of revealing the overall picture of President Jacques Chirac’s museum project.

交付決定額

（金額単位：円）	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,220,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：ジャック・シラク、ルーヴル美術館、ケ・ブランリー美術館、国立移民史博物館

１．研究開始当初の背景

日本におけるケ・ブランリー美術館を紹介した早い時期の文献資料としては、雑誌『芸術新潮』(2007 年 3 月号)　の特集記事が挙げられる。ここでは吉田憲司(国立民俗学博物館教授)が代表的な作品の解説と美術館誕生までの歴史を執筆し、川田順造は「失望と期待と―新博物館が提起するもの」と題するエッセイのなかで人類学の視点から多文化の相互理解への困難さを指摘しつつも、企画や展示の斬新さを評価した。

また、2008 年 3 月 21 日から 22 日にかけ

て、全国美術館会議主催により湘南国際村センターで第 3 回 21 世紀ミュージアム・サミットが開催され、基調講演者のひとりとしてフランス文化遺産局学芸部長でケ・ブランリー美術館文化遺産コレクション局長のジェルマン・ビアットが参加し、同美術館の紹介を行っている。以上のように、我が国でもケ・ブランリー美術館を紹介する記事が掲載されるようになり、講演なども開催された。その他、民族資料を美術品のように展示する方法や、ジャン・ヌーヴェルによる建築が注目されるが、学術研究としては端緒を開いたばかりの段階と言ってよい。

また、広くフランスの美術館を扱った博物館学的研究としては、西野嘉章(東京大学総合研究博物館教授)の著書『博物館学―フランスの文化と戦略』(東京大学出版会、1995 年)が挙げられ、ミッテラン政権下の「大ルーヴル」建設までを論じた。さらにクサビエ・グレフ著・垣内恵美子監訳『フランスの文化政策』では、ミュージアム政策の概要が紹介されている。

そして、フランスにおいても、ケ・ブランリー美術館を扱った文献資料としては、収蔵作品の図版と解説を掲載した作品集やガイドブック、展覧会図録が中心を占めており、シラク政権下の美術館構想全体について、多元的な視点から詳細に分析した総合的研究は、まだ見られなかった。

２．研究の目的

筆者は1987年から1989年にかけてパリのルーヴル学院で博物館学を学んだのち、日仏の美術館に関する研究を進めてきた。その成果として、ダニエル・ジロディ著・高階秀爾監修による翻訳書『美術館とは何か』(鹿島出版会、1993 年)を出版、その後、日本で最初の本格的な西洋美術館である大原美術館の基礎的コレクションを行った洋画家児島虎次郎の研究によって、2004 年に東京大学より博士号(文学)を取得し、同年、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を受け、『児島虎次郎研究』(中央公論美術出版)を出版した。その後も、ミミ・ザイガー著『ニュー・ミュージアム―現代美術・博物館の旅』(鹿島出版会、2007 年)の翻訳書を出版し、1997 年のグッゲンハイム・ビルバオ設立以降、大きく変わった世界の美術館建築を紹介した。さらに翌年、太田泰人・水沢勉(神奈川県立近代美術館学芸員)・渡辺真理(法政大学教授)との共編著書『美術館は生まれ変わる―21 世紀の現代美術館』(鹿島出版会、2008 年)を出版した。本書は欧米を中心に進行しつつある、新たな美術館建築を取り上げたものであり、筆者はミッテラン政権下の大ルーヴル計画と、それ以降も進化し続けるルーヴル美術館をはじめとして、近年のグローバリゼーションと分館ブーム、文化政策など、フランスの美術館の動向を紹介した。

以上の研究をさらに深めるために、筆者は本研究でシラク政権時代に焦点をあて、ルーヴル美術館のパヴィヨン・デ・セッションとケ・ブランリー美術館を中心とするフランスの美術館構想をより多元的な角度(文化、社会、制度、政策、教育など)から分析し、それらの結果を総合的に考察する必要性を強く感じた。

本研究の対象の１つであるケ・ブランリー美術館は、元来、人類博物館や植民地博物館にあったアジア、アフリカ、オセアニア、アメリカの民族資料に美的な視点を取り入れた展示を行った、独創的な美術館である。また、常設展示についても、これまでの人類学博物館には見られない、インターネットの領域に進化させた展示を試みている。本研究は、博物館学と文化政策、人類学と美術史における学際的かつ超領域の、新たな「知の体系」構築に向けた先駆的な事例になり得ると考えられる。

３．研究の方法

本研究は、シラク政権下のケ・ブランリー美術館、ルーヴル美術館内のパヴィヨン・デ・セッションを中心とする美術館構想に関して、文献資料の他、美術館の展示作品や展覧会、建築などから多元的に分析を試みるものである。また、その作業は国内だけでは不十分であり、国外、とりわけパリを中心に図書館や美術館の資料室での文献資料の収集と、ケ・ブランリー美術館、ルーヴル美術館を中心とした実地調査が不可欠である。平成 21 年度から 23 年度にかけて、以下のように調査を行った。

① 平成 21 年度

東京を中心とした国内の図書館や大学、その他の公共機関で文献資料を行った。また、2010 年 3 月 8 日から 30 日にかけて、ヨーロッパ出張(8～13 日ロンドン、13～29 日パリ)を行った。各国の民族資料の展示方法を比較するため、ロンドンでは大英博物館を中心に見学した。また、パリでは、ケ・ブランリー美術館とルーヴル美術館を中心に、民族資料の常設展示と、ケ・ブランリー美術館で開催中の特別展「ジャズの時代」を見学した。また、他のジャン・ヌーヴェルの建築事例として、パリのカルティエ財団美術館とアラブ世界研究所を見学した。さらに文献資料収集は、主にフランソワ・ミッテラン図書館とケ・ブランリー美術館内のメディアテークで行った。

② 平成 22 年度

前年度に引き続き、東京を中心とした国内の図書館や大学、そして、その他の公共機関

で文献資料収集を行った。また、2011 年 3 月 6 日から 28 日にかけて、フランス出張を行った。昨年に引き続き、パリでは、フランソワ・ミッテラン図書館とケ・ブランリー美術館内のメディアテークで文献資料収集を行った。また、ケ・ブランリー美術館の起源であるアフリカ・オセアニア美術館の建築物が 2006 年、国立移民史博物館として生まれ変わったため、この博物館も見学し関連資料を収集した。

③ 平成 23 年度

前年度に引き続き、東京を中心とした国内の図書館や大学、そして、その他の公共機関で文献資料収集を行った。また、2012 年 3 月 5 日から 30 日にかけて、フランス出張を行った。パリでは再度、ルーヴル美術館のパヴィヨン・デ・セッションやケ・ブランリー美術館で調査を進め、また、後者の美術館で開催中の特別展「雨」と「見世物―未開の発明」を見学した。また、同じくシラク政権時代に設立されたポンピドゥー・センター・メッス(2010 年開館)を見学し、特にその建築(建築家；板茂)に注目した。さらに今回はシラク関係者から、本研究に関連した貴重なアドバイスをいただくことができた。

４．研究成果

(1) ルーヴル美術館と≪観衆≫

本研究に着手するにあたり、最初に筆者は、ミッテラン政権下での＜ルーヴルの大改造＞直後にルーヴル美術館の入館者数が急増し、次のシラク政権下においても、さらに増加し、年間 800 万人を超えた事実をふまえ、美術館の受容者である≪観衆≫に着目した。

そして、その背景には、「文化の民主化」を目指し、ピエール・ブルデュー以降、現在に至るまで、社会学者たちによるミュージアム、とりわけルーヴル美術館の≪観衆≫に対する学術的な研究の成果が反映されている点に言及した。さらに、ルーヴル美術館が、学校やそれ以外の文化施設と積極的に協力体制をとっていること、また、毎月第一日曜日の入館料無料化や、失業者に対する無料化の試みによって、入館者数増加に効を奏していることを指摘した。

(2)ジャック・シラクの美術館構想

次にシラク政権下のルーヴル美術館への新たな取り組みとして、大統領の強力なイニシアティヴにより 2000 年、パヴィヨン・デ・セッションにアジア、アフリカ、オセアニア、アメリカの民族資料による展示室が開設されたこと、また、2004 年の「アポロン・ギャラリー」の改修、2005 年の「モナリザ・ルーム」の改修の他、現代作家とのコラボレーション等の新たな試みが行われたことを紹介した。そして、ヴィスコンティの中庭にイスラム美術部門の新館を開設することや、アブダビ首長国連邦の首都アブダビと、フランス北部の都市ランスに分館を建設する計画も立てられていたことを指摘した。

さらに、ドゴールからはじまりミッテラン大統領の時代に至るまでのフランスの美術館政策とは明確に一線を画している、シラク政権下の「多文化共存」の思想の表象として、先に挙げたパヴィヨン・デ・セッションに続き 2006 年にパリに設立されたケ・ブランリー美術館の設立プロジェクトについて、文献資料からその経緯をたどった。

これらの構想から実現に至るまで、ジャック・シラクの強い意志と、フランス共和国大統領としての政治力、さらには彼の個性が関与していたことは明らかである。そして、その検証は、今後、ドゴール以降の第 5 共和制時代の歴代のフランス大統領が試みた、ミュージアム・プロジェクトとの比較の手がかりとなった。

(3)シラク政権下におけるもう 1 つの美術館構想―国立移民史博物館

そして、これまでの調査から、以上のプロジェクトのみならず、パリの国立アフリカ・オセアニア美術館をリニューアルして 2007 年にオープンした国立移民史博物館もまた、シラクが構想実現に向けて指揮したことによって、ようやく開館に至ったことが判明した。

筆者は文献資料と見学に基づき、設立までの経緯と、常設展示室の展示方法や内容について紹介した。また、移民の歴史をテーマとする、フランスでは最初の博物館が設立された社会的背景についても、考察を試みた。

(4)今後の課題

以上から、ルーヴル美術館のパヴィヨン・デ・セッションとケ・ブランリー美術館から着手した、シラク政権下の美術館構想は、予想を越えて壮大であったことが判明した。

したがって、研究目的に照らしてみると、研究成果としては必ずしも完全に達成していないことはいなめない。しかしながら、これまでの 3 年間の研究によって、以上に挙げた新たな事実も発見され、今後、美術館関係者へのインタヴューも予定しており、大きな成果があったと言える。今後もこのテーマの研究を継続させ、美術館構想の全体像を描くために、さらに考察を深めてゆきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

① 松岡智子、ルーヴル美術館と≪観衆≫についての試論、査読無、倉敷芸術科学大

学紀要、15、2010、15－26
② 松岡智子、ジャック・シラクの美術館構想に関する一考察、査読無、倉敷芸術科学大学紀要、16、2011、25－36
③ 松岡智子、シラク政権下におけるもう１つの美術館構想―国立移民史博物館をめぐって―、査読無、倉敷芸術科学大学紀要、17、2012、37－48

６．研究組織

(1) 研究代表者
松岡智子(MATSUOKA TOMOKO)
倉敷芸術科学大学・芸術学部・教授
研究者番号：90279026